

97 誌上発表

日本医学会と日本医史学会

—日本医史学会はなぜ「第一分科会」なのか—

津田篤太郎

聖路加国際病院 リウマチ膠原病センター／北里大学東洋医学総合研究所 医史学研究部

2015年は4年に一度の日本医学会総会開催の年である。「わが国の内外に対する日本医学界の代表機関」である日本医学会は、現在122分科会を擁しており、その第一分科会の地位をわれらが日本医史学会が占めている。しかし医学会発足当時から現在のような編成であったわけではなく、分科会の序列も各学会の設立年度や医学会加盟年度の順ではない。日本医史学会が日本医学会の筆頭分科会となった経緯について調査したので報告する。

第1回日本医学会は、1890年、第1回帝国議会・内国勸業博覧会を機に、石黒忠恵、大沢謙二、長与専齋、高木兼寛、三宅秀が発起人となり、学術上の知識交換を趣旨として全国に会員を募り、東京において開催され、2千余名が参加した。しかし、大家の講義にとどまり、研究討論の意図にかけているとの強い批判も生まれ、第2回日本医学会は1893年行われたものの、それ以降は開催されなかった。

1902年4月、新たに日本聯合医学会が発足し、第一回の総会が上野の東京音楽学校において、田口和美会頭、北里柴三郎副会頭で開催され、日本解剖学会、日本法医学会など16分科会、1700余名が参加した。これが現在の日本医学会の公式の発足とされている。第2回日本聯合医学会は1906年4月に同じく東京で開催され、日本内科学会、口腔外科学会などが新たに加盟した。第3回以降、日本医学会と改称され、4年毎に開催が続けられた。

終戦直後の政治、経済、社会全般の混乱のために1年延期されて開催された第12回総会（1947年3月）において、日本医学会の常設・恒久化が決議され、改組途上の日本医師会と合体した。（日本医師会定款第10章第40条「日本医師会に日本医学会を置く」）

一方、日本医史学会は、1892年に富士川游氏らの発起により、私立奨進医会が設立されたのを前身とし、1927年に現在の名称に改称され、1934年の第9回医学会総会にて第一分科会として加盟を果たした。

医史学会はその前身を含めると設立年度は比較的古いですが、序列が後の分科会の中にさらに古い設立年の学会も存在する。例えば日本法医学会は1887年設立で、初回の日本聯合医学会から加盟している。したがって、日本医学会傘下の分科会の序列は設立年や加盟年ではない。日本医学会に筆者が問い合わせたところ、図書分類法に従って分科会の序列が定められた、という返答であった。

現在の日本の図書分類法は国立国会図書館分類表（NDLC）や日本十進分類法（NDC）が知られているが、NDLCでは医学史が最初に来る（SC25）ものの、第5分科会の薬理学（SC161）が第6分科会の病理学（SC111）より後に分類されておりNDLCではなく、NDCに概ね従っていることが分かる。（NDCでは医学史490.9、解剖学491.1、生理学491.3、生化学491.4、薬理学491.5、病理学491.6、の順。）

ちなみに、米国国立医学図書館分類法（NLMC）では、解剖学（QS）が筆頭で、生理学（QT）、生化学（QU）の順である。医学史はWZで最後であり、しかも1913年以前の図書に関しては“19th Century Schedule”という別扱いの分類がなされている。最近百年間の医学とそれ以前のもので不連続であるという米国の考え方は、本邦との違いを感じさせて興味深い。